此保券。往年浪速ノ隱士。醫世外史ナル者ニ得タリ。源弘賢先年此券書ヲ見タリシ時ハ。未ダ破裂セザル前ニテ。成化甲辰ノ文字ヲ存セシトナリ。今年寛政巳未歲ヨリ遡ル事。二百五十六年ニ及ブ

○足利學校 足利本

野州足利ノ學校ハ。淳和帝天長九年八月五日。小野篁勅ヲ奉シ。草創有リシ學校ナリ。篁ノ子孫斷エテ後。文明年中。僧快元。儒釋同一ノ學ヲ以テ。庠序ヲ中興ス。夫ヨリ以來。代々僧侶ノ住持トナル。慶長年間。采地ヲ賜ヒ。及ビ活板ノ字子十萬餘ヲ賜フ。此聚珍板ニテ。刷印シタル書ヲ。世ニ足利本ト云フ。寺號モ山號モ無ク。只學校トノミ稱ス

○交割

俗諺ニ。家ニ久シク持チ傳ヘタル物ヲ。交割ト云フ事。其解ヲ得ザリシガ。古調雅君ノ雜記ニ。聯餘操筆林春斎著ノ說ヲ載セ給ヘリ。」交割トハ。寺院ノ什物ヲ云フ。唐土ニテハ。寺ノ住持カハル時。什ノ割符ヲ合セテ。什寶ヲ前住ヨリ後住ニ交與ス。故ニ交割ト云フ云々

○東海道國名聯

武相豆駿遠州際。參尾勢江雍路中。」林春斎ノ作ナル由。東見記ニ載セタリ

○勾玉

谷川士清ガ勾玉考。其說精到ナリ。然レトモ言中華ノ書ニ及バス。此頃王子年ガ拾遺記ヲ見ルニ。岱輿山西有曰玉山。其石五色而輕。或以履寫之狀。光澤可愛。有類人工。衆仙所用焉。」恐クハ勾玉ノ事ナル可シ

○驪龍珠

葛西先醒云。驪龍ノ珠ハ鮓答ナリ。馬嘶キヲ驪トシ。八尺ヲ龍トス。驪龍ノ二字。皆馬ヲ云フ

○舍利

又云。佛氏ノ舍利ト稱スルモノ。皆小珠ナリ。按ニ。儒家ノ葬禮ニ含珠アリ。僧徒是ヨリ思ヒツキ。潛ニ死者ノ口中ニ小珠ヲ含マシメ。荼毗ノ後。指シテ以テ舍利ト爲スナル可シ

○幣

幣說文云。幣帛也。周禮天官大宰註云。幣帛所以贈答賓客者。トアリ。奴佐ト訓ズ。按ニ。叩頭拝ノ略ニシテ。乃聘物ヲ云フナリ。布帛ヲ木ノ枝ヘ打チ掛ケテ。神ヘモ貴人ヘモ奉ルヲ云フ

幣ヲ爾藝豆トモ訓ズルハ。和布ノ義ニシテ。布帛ノナコヤカナルヲ稱シタルナリ。又。和名抄云。論語注云。幣。今江東云幣帛。和名。美天久良」スナハチ滿座ノ意ニテ。幣ヲ置キ盃チタルサマヲ云フ。是モ亦用ヲ以テ體ニ訓ジタルナリ

小ナレバ枝ヲ用ヒ。大ナレバ根コヂニ拔キタル木ヲ用フ。今祭禮ニ用フル榊ハ。其形ヲウツセルナリ。又。紙ノ切垂タルヲ。木或ハ竹ニ挾ミテ。神ノ社ニ奉ル物ヲ幣帛ト云フハ。其モツトモ略ナル物ナリ。古クハ神詣スル人。幣帛ヲ手ヅカラ作リテ携ヘ行クコト。福富草子ノ畫ニ見エタリ。又旅行スル人ハ切麻トテ。又麻ヲ奴左ト訓ジタルハ。用ヲ名トレタルナリ 青。黃。赤。白。黑。或ハ紫 ノ麻布ノ長四寸。幅八分ニ切リタルヲ重子テ結ビ。白キ紗カ縠子ノ袋ニ入レ。道スガラ神ノ廣前ニ捧ケテ手向スル料トス。其袋ヲ麻袋ト云フ。ト部家ニテ用ヒラルヽ袋ノ圖式ニ。寸法ヲ悉シク記セリ。好古小錄ニ載セタル麻囊ハ。田舍ニテ葬送ノ時。柩ノ先ヘ持タシムル。花籠ト云フ物ナリ。籠ノ内ヘ。五色ノ紙ニテ切リタル花形カヽル不淨ノ物ヲ。爭デ守佐ノ神事ニハ用ヒ來ニケン。御簾ノツマ〳〵透影ナド。春ノ手向ノ麻袋ニヤト覺ユト云ヘル源語ノ文ニハ。紗モテ作レル袋ノ目ヨリ。切麻ノ色々スキテ見ユルヅ。親シカルベキ

○翁變文

連歌師阪昌周。東都山伏井戸ニ僑居ノトキ。隣家ノ老父。翁ヲ好ミテ作リケルガ。長ヲ延ハサズシテ。花ヲ開カシメン事ヲ欲シ。年々切リツメ苟リコミケル程ニ。二三年ノ後。變シテ文ト爲リヌ。唐文ノ名宜ナリト。昌周ガ云ヒケル由。予ガ劣ナルヒ。杉田老賢。先考國訓法眼ヘ語リケルヲ。思ヒ出ダセル儘。爰ニ記ス

○市語

往年薩州ノ人ノ。隱語ニラ謔戯ヲ打ツヲ見タリシガ。一ヲタンソコ。二ヲヨコガハ。七ヲ毛ノ尻。九ヲ丸マラズ。ナドヽ云ヒタルヲ。興アルヿトノミ。聞キ過シヽガ。此頃堅瓠集ニ。委巷叢談ノ市語ヲ載セシヲ見テ。始メテ唐山ノ市語ナル事ヲ知ル。杭人三百六十行。各有市語。中略 不若吾鄉市語有文理也。一爲旦底。二爲斷工。三爲横川。四爲側目。五爲醫丑。六爲撤大。七爲毛根。一作皂脚 八爲入閑。九爲未丸。十爲田心。」全ク是ヨリ出テタルナリ。東都ノ一大刹ニ。數字ノ廋辭アリ。一大無人 二天無人 三王無中 四罪無非 五吾無口 六交無人 七切無刀 八分無刀 九丸無丶 十千無ノ

コレモ亦文理アリ

○義經之笑

源廷尉奥州下向ノ時。解魔法師ニ打扮。千磨百難ヲ歷テ羽州ニ到リ。是ヨリシテハ。秀衡ガ

領地ナレバ。旅装ヲ改メ彼館ヘ趣ク可シト。主從サハヤカニ装ヅキテ下ラレケル。其時ノ笈。山形ノ領内。七箇寺ニ一宛傳来ス。何レモ紙ニテ張リ。柿漆ニテ塗リタル物ナリ。義經ノ笈ハ小形ニテ。内ヲ觀音經ニテ張ル。伊勢三郎ガ笈ハ勝レテ大形ナリトヅ。家兄山形侯ニテ。義經ノ笈ヲ一覧セラレヌ。甚殊勝ナル物ニテ有リシト語ラレキ。

○鬼一法眼

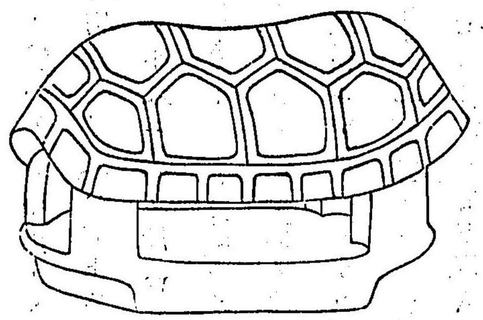
貝原益軒翁ノ知約ニ云。鬼一法眼ハ。堀川ノ人ナリ。兵法ヲ知レリ。軍法。弓馬。劍術コトゴトク人ニ教フ。鞍馬ノ衆徒八人ニ傳フ。劍術ニ京ノ八流ト云フハ。鞍馬八人ノ衆徒ノ傳ヘシ流ナリ。義經モ其八人ノ内ノ弟子ナリ。後ニ鬼一ニモ習ヒシトナリ。世俗ニ天狗ニ逢ヒテ劍術ヲ授カルト云フ。虚誕ノ説ナリ。又。關東ノ七流ト云フハ。鹿島ノ神官ヨリ出テタリ。凡劍術ノ流ハ。京都八流。鹿島七流ヨリ外ハ無シトヅ。」知約ハ翁ノ抄録ニシテ。百頁バカリノ綴本。數十巻アリト也。筑前ノ邨山芝塢。其書ヲ見ルヿヲ得。拔萃シタル小冊有リ是其内ノ説ナル由。氷齋ヨリ得タルヲ爰ニ記ス。

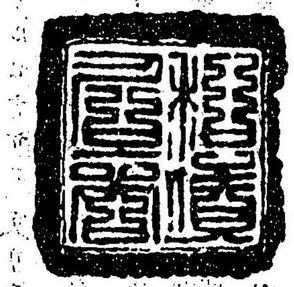
○金聖歎

天漢浮槎散人ガ戯編セル。秋坪新語ニ云。金聖歎著ハス所ノ解唐詩。五七言ノ律詩ヲ中ヨリ分チ。上四句ヲ前解トシ。下四句ヲ後解トス。當時ノ人戯レテ。唐詩ヲ腰斬ニ爲タリトヅ稱シケル。一日金京師ヘ行キケルガ。東ノ四牌樓ノ邊ニテ。内逼ケレバ。街心ニテ袴ヲ褪。大便ヲ遺ケルニヅ。見ル人駭カザルハ無シ。坊卒出デヽコレヲ叱リ禁ムレバ。金傲然トシテ色ヲ作シ。且便シ且咤ヒテ曰。群狗吾矢ヲ噬ハントスルノヤルセナサニ。反リテ我ヲ叱ヤト。坊卒大ニ怒リテ鞭打テバ。金モ亦大ニ怒リ。侈口ニ毒詈ス。坊卒腰ニ居エカ子。金吾ノ處ヘ達シケレバ。拘ヘテ訴爲ケル所。イヨ〳〵惡言止マザリケル故。遂ニ公ノ沙汰トナリ。平日ノ事蹟ヲ搜査アリシニ。著ハス所ノ書不法ノ語ノミ多カリシニ依リ。（中良按ニ。水滸傳ノ評。其モツトモ甚キ物ナリ）誹謗ノ罪ニ坐セラレ。市ニテ腰斬ニヅ行ハレケル。唐詩ヲ中ヨリ分チタルハ。其濫觴ナリト。成。人云ヒアヘリシトナリ。」予友必端堂ノ主人。聖歎外書ノ一種。賈華堂選批唐才子詩甲集ト云フ書ヲ（賈華堂ハ聖歎ノ號ナリ）藏ス。七言律六百首ヲ説キタリ。前解後解ト分ツコト解唐詩ト全シ。序ニ。順治十七年二月八之日。兒子雍ガ請ニ依リテ。唐詩七言律體ヲ説キ事ヲ述ベ。大易學人金人瑞法名聖歎述撰ト記ス。第八巻末頁ニ。順治十七年四月十八日。説唐人七言律詩竟。（男雍釋弓華受斤補註）」トアリ。解唐詩ハ五言律ヲモ説キタル由ナレバ。恐ラクハ此書ノ續集ナル可シ。

○林氏印

東都隱士藏六居ナル者。古銅印ヲ藏ス。其製奇古ナリ。形圖ノ如シ。印文和靖信齋トアレバ。林氏可山ノ印ナルベシ。」因ニ云。林和靖ノ像ノ傍ニハ。必。鶴ト梅ヲ畫ク事。褚緐軒ガ堅瓠集ニ說アリ。宋ノ林處士和靖。隱居西湖之孤山。以梅爲妻。以鶴爲子。朝廷賜以粟帛云々





桂林漫錄 終

夜光之珠。愚者怪焉。楚山之璞。識者寶焉。物之顯于世亦必得其人耶。如當時歐盧陵董廣川輩。非攸其人耶。乃謂之千載知己亦可耳。桂林主人此冊概登金石書畫古器之類。益于多聞者數十條。額曰漫錄。其詳論精核。乃稽古一端也。然則若此錄亦謂之千載知己而可也。不其然乎。抑何漫然

氷齋鉉題

展覧会の本

○本居宣長小傳

本居宣長は勢州松坂の人なり姓は平父を定利といひき權大納言頼盛の後裔なり今を距る事殆百六十年享保十五年五月をもて生れたり幼名を小津富之助と呼び名を榮貞字を彌四郎又健藏といひき廿二三歳の時家號小津を廢して本居に復しその後兩三年を經て名を宣長字を春庵と改めぬ齡五十を過ぐる頃より家の名を鈴の屋と號せり

幼にして父に別かれぬされども性来讀書を好みしかば母も痛く喜びて薫陶怠らざりき十二歳の時四書を學び初めしが其の勉勵の非凡なる記臆の絶倫なる早くも世に知られたれば神童とさへ呼びなされたりき後五六年みづから歌よむことをならひ廿三歳にして京都に上り堀景山につきて儒道を修め後二年典藥武川法眼を師として小兒科の醫を學びたりこれ母の意に從へるなり廿七歳の時始めて契沖の著せる百人一首改觀抄古今餘材抄勢語臆斷等を讀みて古典研究の念を起し翌年加茂真淵の冠辭考を見て益其の志を定めたりといふ既にして故里に歸り醫を業とせしが人みな其の親切なるを喜び一時は治療を請ふ者も頗多かりきとぞ寶暦十一年真淵主命を帯びて伊勢大和山城の諸國を巡り歸途松坂に一泊せしかば宣長聞きて喜ぶ事限なく直に其旅寓

よつき名簿をおくりて質疑數刻に及びぬ時に真淵いへらく余かねてより神典を解釋をるに意あり然れどもこれ容易の業にあらぢ能く古言に通じ古意を得ざれば能ともぢ故にまづ萬葉集を明めんとして今をでに老いぬ汝いまだ壯年の身なり黽勉おこたらぢばこれを果さんこと難きにあらじ能く心に銘じて忘るゝ事なかれと神典といへ蓋紀記二典及祝詞等をいふなるべし宣長面に感慨の色をあらはし一禮して退きぬとぞこの時宣長三十二歳爾後常に書を通じて古典の疑義を質し自も大に發明する所あり終に三十五歳古事記傳の稿を起しぬまた餘暇には和漢古今の諸書を渉獵し年々書を著して世に公にしたるもの擧ぐるに遑あらぢされば其の名もおのづから世に聞え寛政六年六十五歳の時領主紀伊侯に召され古典及歌道の事を進講せしかば侯大に喜び直に登用して奥醫師の列に加へ俸を賜ひ其の用ふる所もとより文學にはあれど其の本業醫たるを以てなり後また鄕里に歸り居る事數年にして享和元年人々の請に任せて京都四條の烏丸の東に寓せしかば古典に志あるもの續々諸國より慕ひ上りぬといふ門人すべて五百人其の門下よりいでゝ名を成せるものまた尠からぢかの平田篤胤の如きもまた沒後の門人なりこの外當時の臺閣縉紳も皆其の名を聞き或は殿内に

召し或は寓舍を訪ひてその講話を聽き和歌の添削を囑するもの絶えざりきとぞ同年六月松坂の家に歸り九月十八日より不圖病に罹り同廿九日の曉に沒しぬ享年實に七十有二歳なりき子春庭壻大平等を經子孫なほ其の學派を襲ぎて今も世に聞ゆ

宣長稀世の才をもて博く群書を渉獵し往々寢食を廢して著述に從事したりき其の說く所先輩未發なる多くしかも考證確實にして大に古典研究の模範を示せり其の著す所凡七十部最秀でたるものを古事記傳とす古事記は上中下三卷ありてが國最古の歷史にして正確なる古傳古語を載せたるものは實にこの書と日本紀とあるのみ故に其の貴き事いふべくもあらず然れども其の漢字をもて國音を寫せるものなるから之を讀むに當りて困難いふむかりなしされば先輩も往々其の解釋を試みたりしかどみな其の功を畢へざりきこゝに宣長奮然として志を決し終に其の生涯を寄せてこれが解釋を施せるなり上卷に二十三年中卷に六年下卷また同じく六年總て三十五年を費したり全部四十八卷其の考證は何れも精確を極め識見卓拔にして一朝千古の雲霧を拂ひ赫々たる日光を仰く事を得しめたる其の效實に偉なりといふべし或は強に一二の瑕瑾を索めいでゝ全體を非議するが如きは固より論ずるに足らざるなり

また古歌古文を解釋せる書類甚多し萬葉集玉小琴古今集遠鏡歷朝詔詞解源氏物語玉小櫛なほあるべしまた漢字三音考字音假字遣地名字音轉用例などよく音韻の事を論じ詞玉緒紐鏡言語活用抄等委しく文法語格の用例を示せるなど後人の尤感謝する所なりまた直日靈玉櫛笥玉鉾百首等專我が國固有の大道を發揮し取捨慨言い尊内卑外の意を辨じたりこれい嘗て京都にありし時當時の攝政の内命を受けて上りしものなりといふこの外玉匣別記あり紀州侯の國政の諮詢に應へ奉りし意見書なり江戸の人市川某末裔延北禮といふ書を著して直日靈を難ぜしを門人等のいたく憤りて強ひて請ひたれば忽葛花二巻を著してこれを排したりまた藤貞幹といふものあり大に宣長の學派を惡み衝口發といふ書を著してこれを駁せしが宣長また其の大義に關するを慍り直に鉗狂人を著してこれを辨じたり隨筆あり玉勝間といふすべて十五巻有益なる諸説多く文章はた快利なり

鈴屋歌集文集九巻あり宣長の和歌並に雅文を載せたるものなり詞藻富贍にして語句艶麗加ふるに其の氣韻の高尚なる見るべきもの少からず本篇もまたこの類なり然れども宣長いもとより華文綺語のみを弄するものに非ずまたたゞ和歌文章のみをもて

名を成さんとするものに非ざるい其の著書を見ても知るべきなりまた解釋議論隨筆等の文い殊に易らかにして能く事理を穿ち意明らかにして聊も滯ふる所なきのみならず語格文法の正しき以て當今普通文の模範ともすべし或い此等の文章をもて却りて琢磨修飾したる雅文に勝れりといふも宜なり直日靈秘本玉櫛笥玉勝間等殊に然りとす要するに宣長い東滿真淵等に繼ぎて國學を大成したるものなりなほいたゞ夢閉せる古書の雲霧を散じ繁茂せる語格文法の荊棘を拂ひ暗夜に乘じて皇國の大道に電燈を點じたるものならん後世其の恩を蒙り其の澤に浴するもの幾何ぞ東滿真淵宣長及篤胤を稱して「國學の四大人」といふも決して偶然にあらざるなり

宣長性温厚にして篤實なりき效あるにあらざれば決して人と物を爭はず平常用意周到にして事に臨みて驚かず六十一歳の時みづから像を描きて一首の和歌を添へたりかの人口に膾炙する「敷島のやまと心を」の歌これなりまた没するに先つこと一年伊勢國飯高郡山室の山上に墓所を定めみづから碑を建て歌を詠じていとく「山室に千年の春の宿しめて風にしられぬ花をこそ見め」と其のよろづに意を用ふる事おほかた此の如しまたすべて世に學者と呼ばれ豪傑と稱せらるゝ程のものい往々友を百

世の下に求むなどいひて世を愚弄し塵事を顧みざるが常なるを宣長は更にさる事なく常人と交るにも至りて懇篤なりきとぞこれまた一家の見識なり賞すべし其の常人に交るすでにかくの如しさるを道を往けばかならず人の常にこれを避けたりときくは其の威風のおのづから凜々たりし今もおもひやるべし日記あり今なほ本居家に藏せり二十九歳より身終るまで四十四年の間一日も缺くる事なく其の文體といひ書風といひ終始一轍にして少もかゝる所あるを見ずまた思想の精密にして諸事に整然たる秩序あるを見るべし今宣長の性質を叙するに當り殊にいふべきは其の孝心の深かりし事これなり父佛を信ぜること極めて厚かりしが宣長は心もとよりこれを憚ぶものに非ざれども父歿して後その命日の至る毎に朝夕靈前に向ひて讀經したりといふまた醫は母の意なりとて終身廢てゞ講義中と雖も人の迎ふるものあれば これは本業なりとて直に應ぜざるはなかりきとぞあれ三年父の道を改めざるをもなほ孝といふべしとかや宣長の如きはまことに孝の至れるものといふべきなり其の古典を研究して偉大の功を奏せしも畢竟これは基せしならん蓋親を思ふ心即君を思ふ心となり君を思ふ心即國を思ふ心となるものなり當時漢學のみ盛に世に行れて

國學いまだ開けず大に内外の別をみだり本末の序を失ひて動もすれば大義名分に關する事さへ多かりしかば宣長いたくこれを憂へて終に國學の研究に心を傾けしなるべしまことに國に固有の學問ありとも其の研究淺くばいかでか人々其の國柄を知り其の國美を尋ぬる事を得ん故に古來往々いたづらに他國の風を慕ひ異邦の美に惑されて遂には自國をわするゝに至るものなしとせぬ宣長の意をこゝに注ぎたる卓見といてんも愚なり後年王政復古の議の起りしその力少しとせぬといふべきなりされば其の功績は文學上直接の勲勞と共に萬代不滅といふべきなり明治十六年二月朝廷正四位を贈りてこれを賞したまひしもうべにこそ

尾花が本

本居宣長著

思ひ草は。秋の野の尾花がもとに生ふとかや。またこのけぶりも。其名にたぐふ心ちして。室のやしまもとほからぬ。とこ長久とはにかれつゝ。人の口のそにのみぞかゝる。さるに。いひけ消たれても。なほふかくおもひいれて。もゆるけしきに。いぶきの山のさしも草にもことならぬ。かくのみたえぬ。なげきせる。てはいぶせくきたなげになりてすてらるゝよ。いとかくあだなる物とは思へど。とあるごとは。なほ世にあらぬおかしき物にそあなれ。かゝるも。むげにちかき世の事ぞかし。むかしはをさ〳〵名をだにしらざりしものの。やむことなきあたりまで。もててやさるゝもいかなるわざにか。人の國にも。いにしへは。かゝる物ありとも聞えぬ。此頃渡りまうでくる文どもにこそ。こゝにもつゆたがはでもてあそぶよしみえたれ。はるかなるせかいより。此國にめづらしき物ども。あまたあたらしもてくる人を。まれ〳〵見るにはなほまさりて。あながちにこのめるさまなり。

「鶯の谷より出でし初こゑに。世もおしなべて春めきつゝ。やう〳〵。風なづかしう吹き

あたして。おほかたの花の木どもゝけしきだみ。梅ゝ今をさかりまて。まほひまかすむ大空のれどけさま。そこゝかとなくあくがれいづる。春のひかりまかしらの雪もきえ果てぬべく。おいたるも若きも。おのかじしきよらをつくし。美服とがむむかりの香ましみたる。くれなゐの袖ふりゝへて。行きかふ人をまちまうけたる。かりのゆかなどましむしやすらひつゝ。まづ火もてこといひたるま。きよげなる女のあゝ〳〵しげまもていでゝ。なめげまさしおきたる。さるがふことなどいひあざれたる。いとをかし

有明の頃。ものへまかるとて。夜をこめて立ち出づる空ゝ。月影くまなきま。やう〳〵。東の山ぎはあかりてしらみゆくほど。なほ行くすゑゝ霧あたりて。そるかなる野べま。をり〳〵まうちてたく火のけぶりあらむと。貫之のぬしのいひけむことのゝなんど思ひ出でられて。ゆく〳〵燧りいでつゝ。とぶ火のひかりを。野守がいほまゝあやしと出でゝやみるらむ。かくてまだ。思ふさまならぬま。火のきえぬるゝをしき物なり

ふみ分けてこし跡だまなき庭の萩原。ことゝふものゝ風のみまて。いとゞ身ましみつゝ。色みえぬ心ゝ。木の葉と共まうつろひゆく秋の夕暮。いまさらまつといなき物から。うちしをれたる淺芽が末の露のそこより。心ぼそう鳴きいでたるまつ虫も。誰をかと思へば人わろくなみだのこぼるゝもつゝましくて。まぎるゝかたもやと。手ぞさみのやうま。手つきいとなよらかまて打ちみじろくさまもらうたしや。風まふかれてよこさままたちのぼる烟の行くへも。つく〳〵とうち詠められて。あれつらきかたまも。吹きつたへてしがな。さらば。人しれぬ我おもひも。空ましるくや見ゆらんと思ふも。中々の心のもしほならん

ふつゝかまふとり過ぎたるげすをのこの。かほまくさげなるが。くつろかまうちあふぎ。ひげかいなで撫ゝくてへゐたるゝ。引きてなちてもすてまほし

かりそめまの物したるまらうどまも。すべてとりあへぞ。まづいだすものなるを。すかぬゝやうなしとてかへしたる。そえなき物なり。客「心地れいならぞなやみゐて。はかなきくだ物などをさへ。いとものうくしたる折まも。いさゝかおこたりざまなるまゝ。まづおもひ出づるぞかし。つねますける人の。きよくとほざけて日數ふるゝ。とぶらひきたる人などまも。しか〳〵なんさぶらふなどもいふかし

水無月廿餘日のひるつかた。扇の風もよまぬるく覺え。夕風まちつくる程もたへがたくて。のきちかううたゝねしたるま。ふと目さめぬればかたしけるかたの。あせましめらひ

て。いとゞ物むづかしく。あつさ所せきを。めするゝ引きよせて。火たづぬるもあながち
なりや。今ぞすこし。庭の稍もうちそよくほどなる　四
あまりしたしくもあらぬ人のもとまて。物がたりし。例のいだしおきたる。とかくして時
うつり。火もしろきてひがちまなりたるをたづぬるま。てやくきえぬる。たゞまさしおく
がくちをしければ。あるじや心づくと。しむしかきさぐりゐるを。とく見て人よびたるは
よし。心やすきわたりまてい。いかまもせむを
あらゝ　しう吹きしをりし嵐も。なごりなくのどまりてせんざいのこぞ系もいとゞさ（前載）
びしく。木の本まくちのこる落葉も。あさ霜ながらの氷まうづもれ。空さへ雪げまうちく
もりぬる夕ぐれ。やゝちりくる花まぞ。春のとなりのちかければと。すこしさうゝしさ
もなぐさみて。ながめいだせるま。ねぐらまかへるゆふがらすの。三つ四つ二つなきわた
るも。いとさむげま見ゆ。かくしつゝ。てやくれ竹の葉ぞ系なんどより。やうゝしろくな
り行くほど。さすがま。まだ物のけぢめ（差別）も見えわきて。やり水のほそうて殘りたるなんど
もをかし。内外人のけてひもいたうしづまり。つれゝなるよひの程。庭ま跡をもいかゞ
いいとひあへむ。そも何ぞかりの心ざしまてかは。かゝる雪も。よま物する人のあらんと

（徒）うむじゐたるをりしも。かどのかたま入りくる人のけてひぞする。袖うちてらふほども。
心もとなくて。てしちかうたち出でつゝ見れば。あけくれ二なうむつびかてす人の聲ま（來客）
（主人の心）て。いかゞ物し給ふ。こよひの雪をひとりもてあそぞむ事のかたてなるこゝちし侍りて（不滿足）
（客言）なんなどいひたる。うれしくて。いでやこゝまも。心むかりいかき分けて思ひやり侍りし
（主人の言）かど。ならてぬ夜ありきい。ものうくてなんなどいらへつゝ。れくのかたまいりて。いとお
ほきなる火おけま。すみこち（無飾）〳〵しうおこし。つとよりゐて。なまくれとむかしいまの物
語しつゝ。よひ過ぐる程。いとすごくしめ〳〵と心ぼそくて。雪をれの音のみ。しむ〳〵き
こゆるま。ふりつもる程もしられて。こよなうさむけしや。あかぞむかひゐたらむ程。れい
のけぶりい今さらまいひたてぞとも。空ましるべし。夜やう〳〵ふけゆけば。かへるよし
ま て。心なき長ゐのうらを。下部などや。海士のすむ里のしるべとおもひ侍らん。ねむたう
（客言）ぞおてすらんなんどいひつゝたつ。なまかい。千夜を一よまとも思ひ侍れど。御心とまる
（種子）べきくさてひまも侍らねば。しひて今（主言）暫しともいかゞい聞えさせむ。ふりてへてとてせ
給ふみ心ざしいさる物まて。雪こそふかく侍るめれ。みちの程もおぼつかなし。あかりの
御まうけやさぶらふ。まゐらせてむやなどきこえつゝ。ぞんざよむすれば。ねぶりゐたる（從者）

が。かほふくらし。あくぴうちしてはしりくるもをかし。立ちいづるほど。おくより。御たむこいれなんのこりて侍りしとて。わらゐべのもていでたる。こゐわすれまけりとて。ふところまさしいれていぬめり

さかつきいだしてのみかえすをりなんとゐ。ろんなうけおされまたるやうなれど。めぐりくるもまどほきひままゐ。なほしも。はた。えあらぬぞかし。下戸ゐさらなりや

かのわすれおきていなむとしたりし物よ。をり〳〵の心ぞへ。時まつけつゝしいづるたくみ。年々月々まめづらしう見えしらがへば。いたりまくなきわか人なんどゐ。いとこのましうしつゝ。ふりぬさきまと。いそぎもとめて。ほこらしげまもてありくを。人もこやうもたりけるこそくちをしけれ。大かたかやうの事。人まあらそひうけむりたるこそ。いとをさなきわざならめ。めでたしとこひて見るだま。したりがほしたるゐまくし。またあまりきすぐまて。いつもふるめかしきかたをのみまもりゐたるも。折まふれ所まよりてゐ。さゐいへど。えゑなきわざなり。只なまとなくおいらかまなづかしうきよげなるを。あるまかせてもたまほし。さりとて。ひたぶるまえんだちなまめきたるも。女なんどこそさもあらめといとをこがましく見ゆるぞかし。かうやうのすき〳〵しさも。わかき程ゐつ

みゆるしつべし。さたすぎたる人の。ようせぞいうまごもいだきつべきころほひなるが。いまめきたなやぐこそ。あひなき物なれ

いふがひなく。年まかりより侍りてゐ。何事まつけても。おのづから人まの心をおかれ。さるからうちいでむとおぼしき事もつゝましく。又おのづからひが〳〵しき心も。いでまうでくるわざまは侍れば。おのづから所せきものまなりゆき。うたてのおきなやと。うちあゐめられ。まじらひふれば人もあり。かたき世まこそ」なんどかたりつゝ。きせるかきのごひ。みがきなんどしつゝのみゐるゐ。わかゝりしより。たがひまの心かゐらぬ友ならんと。見つゝ心苦しく聞きゐるわかうどさへ。えあらぬ。ましてひとりつれ〳〵まあかしくらすらんおい人の。身をさらぬ友としたるゐことわりまこそと。もろこし人の名づけゝむも。げまさることぞかし

世ぞなれ物すごきみ山のおくまも。すめば年月をかさねてすむ物の。花もみぢうつれば かえる折ふしのさびしさを。いがぐゐせむ。秋のゆふべ霧ましをるゝ槙の下露をながめ。夜ふかく松のみのほろ〳〵と落つるを。ねられぬみゝまきゝゐたらんほどなんどのつれ〳〵ゐ。金爐烟靄のすこしきなるまのみぞなぐさめてまし。何となくはかなげまおよ

びまする。めぐらしゐたるも。さびしげまに見ゆ。あはれ。源氏の君の。須磨の御うつろひのほど。御つれ〳〵なりし世まも。かゝる物ありてましかむと覺ゆ

えなやかまに。今やううたひ。いとなづかしうひきすましたる物のねまに。きゝゐる人もおのづから時々聲うちそへ。かたえしつゞしりうたひつゝ興じたる。きゝしらぬあたりも。させるしてしどけなくひやうしとりゐたる。さうゞしからぬわざなりや

ふたよ三夜夜離よがれし床のうらみもちりも。まだつもれるといなけれど。大ぬさのひくてやよそまなんど。かこちつゞくる言のえをあいれと聞きつゝ。つひのよるせをかたらひなぐさめなんどしつゝ。かたみまぬらす袖のうらまもたくものけぶりいたつとなむ。枕互より外まもらさぬむつ物がたりもきゝあかすらん。鐘の音も曉ちかくつげわたせど。つきぬちぎりい。なほ有明のつれなき空まに止めれきて立ち別れむとする程。妻戸おしあけつゝ眺めいだして。頓まもいでやらぞ。あしたの霜のと打ちぞんし。衣うちえおり。ひもさしなんどする程。女もなほあかぬさまにて。海士のもしほ火まさたきそめ。およびしてけしきむかりかいのごひ。こゝろありげまさしよせたる。まくからでとりつゝ吹きいづるけぶりま。入りかたの月かげさとくもりたるい。いひしらぞ衰まえんなる明けがたのけしきなりとかや。又人めをつゝみ色まもいでゝ。わりなき戀をするがなるふじの煙のくゆりわび。空まきえなむ思のほどをも。かゝるたよりま人づてならで。さながらほのめかし出づるわざもありとかや

女いおほかた。すかざらんがまさりてぞ見ゆる。なよびよしめくかたまいたよりともなりぬべけれど。さるからいとぞおもまくきかたも添ふかし。されど。今いれしなべての事まなりぬれば。もちひざるい中々さうゞし

二つ三つむかりなるちごの見ならひて。ちひさき手さしのべまさぐりつゝ。口まさしいれたる。あやふしとてとらんとするを。むつがりすまひたるいとうつくし非

鼻よりふとけぶりのたちいでたるを。炭がまのやうまに覺えつといひし。さは其人のかほや雪のやうまありけむといとゆかし

輪ませむとて人の吹きいでたる。烟のをかしくまどかまて。いくつもつらなりあがるを見て。我もなじかいあやまたむ。いとよくして。見給へなんどあらがひつゝ吹き出だしたるま。あやしうみだれぬる。心うがりて。此たびいいかでと。いたう口つきつくろひ。心無徳したるが。又吹きそこなひたるいとむとくなり。これをやけぶりくらべといふべからん。

わがけぶりゝ人のむせびて。かほあかめ。してぶきしきりゝしたる。いと心ぐるしをてたるゝなほ立ちのぼる烟ゝ。みな人のいとふわざなり。やゝといふ物の口ゝいりきて。ひたひゝしわよせたるもおかし。ゑひてかしらいたくしたる。又おかし

思ふどち二人三人類して北野へまうでけるゝ。いつも人多くまゐりたる。まして廿五日なんどゝ。おまへわたりところせく立ちこみて。ちかづくべくもあらぬゝ。からうじて御てしをのぼり。かうらんのほとり。かたてらよりをがみ奉る。こゝらの人。おのがさま〳〵何事をいのるらむ。いと久しくふしをがみ（叩）ぬかづき（頭）ゐるも有り。かれむみたる辭（許多）して。なゝがしそくさいのためなんどけい（啓）するもほの聞ゆ。こと〳〵しきかして手のひぎきゝ。あら人がみのかしこき御耳をもおどろかし奉るらんといとたのもし。手さしのべ。十二銅の心ざしとて奉りたる敬白のかた。うちならすもいと（暇）なく聞ゆ。おくのかたを見いれたれば。御札巻數（束）なんど宮僧ばらのとりいでゝさづくる。いたぐさてまかんづるもあり。すこしこなたざまゝに。打ちさうぞきてたらひもなゝもしのびやかゝよみゐたる。法師ゝだらゝなんどゆるゝかゝねんぜるもたふとし。みあらかのうしろのかたより。いそがてしげゝめぐりきて。みはしのもとゝて。かたむかりをがみつゝ。又てしりゆくゝ。もゝ

たびまうでとかや。さるゝ。手ゝ數さしゆくも中ゝ見ゆ。南の御門をいでゝあそこおゝ物みありさ。下ざまへゆくゝ。寺なんどもおほくならびたてるまへを過ぐるゝ。かたてらより。痩せさらぼひていみじきさましたるかたゐ（乞兒）のつとよりきて。あが君〳〵たむこすこしといひたるぞいとこちたき。いひをだゝ思ふさまゝにくてざんめるものゝ。これをしかあながちゝこふ事ぞよゝあやしき。かへりもみでゆくゝ。なほけしきとりつゝかゝづらひくるを。うしろより。ぞんさの制する聞きもいれぞ。すこしえさせたるゝ。二なうよろこぼひていぬるぞ。いとあてれなるや

月のまへ花のもとゝいさらゝもいてぞ。すべて折々の興あるふぜい。めづらしき浦山のけしき。えならぬなんどを見るゝも。思ひいでゝとりあへぞ。をりからのおかしさをもそふる物ゝこそ

あやしの山がつどものつま木負ひたるが。あまたかいつらねて家路をいそぐ。そばつた（傍傳）ひかたなりなるわらてべなんども。程ゝつけつゝゝなひつぐけたるぞおかしき。すこし（不完全）たひらなる所ゝて。木どもゐむし枝ゝあづけおき。まろがれあひて打ちやすみたる。てけ（天氣）のことなんどいひつゝ。例のけぶりゝおのがじしたつめれど。かうやうのものゝゝ。ゝほ

ひなんども中々うるさければかゝを。たかさいやしきほど〳〵まつけつゝ。もちふるきざみ〳〵有りて。國々ところ〳〵まなたゝるたぐひおほく。れのづからその品かもり。はた匂よりもしめて色ことまる。あぢもひおなじ物ならを。よきゝよく。あしきゝあしくて。いとようけぢめ分るゝものなり

旅人の行きかふ道なんどまゝ。所々まさざみたむこなんどゝ。いと大きまあしでのかき（蘆手）そこなれたるやうま。しやうじなんどまかき。あるゝ物の系（繪様）やうなんどおかしげま。あやしうかさなしたるを見つゝ行くゝ。めさむる心ちす

春の末つかた。野べまに打ちいでゝ田のもを見しかば。しづの男がたがへしやすみて。道のべましりさしすゑ。こしよりきせるとうで（取出）。あつごえたるたむこいれよりひねりいだし。こちく〳〵しうおしつぎてくゝみつゝ。かしらかたぶけて火うちひらめかし。口つきおかしげまのみゐたる。もてゝゝ火けたじとて。手のうちまたゝきあけて。あつければまろむしながら。又かいつぎたるこそいそがもしく見えしか。また木の道のたくみ。さらぬよろづのなりもひまも。身をつとめこうじまたる。おむしやすむとてゝ。かの一服をしたまちつ（心待）ゝ。こゝもとしもてなんどたのしみもげむめり。大かた朝夕のさへ。たえ〳〵なる屋まも。

なほ此けぶりゝたつるぞかし

いづくまもあれ。出でたるまわすれてもてこざりしくちをしさよ。又粉のやうまなりたるまも。をべて人まもとむればひげしつゝあたへたるきせるのりなんと。すべてなめげ（無禮）なること。人まの物こふことなんどゝ。大かたつゝましくてせぬわざなるを。是のみ何ともおもゝを。ならひまなりぬもいかなるまか

きえぬる。すてむとてさしよせたるま。人も同じさままして。ほうとつきあひたる。かたみまゆづりあひてまちたる。かしこまりある所なんどまてゝ。まづともいふかし。火つくるをりなんどゝ。さてまつ程も久しく覺ゆ

人まつかゝるゝわらもの。まだゆるされぬ程。わりなくこのみて。使の道なんど。おる人の（無分別）がりのくろへつゝ。立ちよりてゝ。こよなうおそのりきと。いちもやくいもるゝ物から。とみの事いひまやりたる折なんども。なほこりをまのあまのもしほ火。けぶりのたえまをうちさびしとぞおもひたんめる

露ばのりのすひがらより。火いでさておほくの屋どもやけうするためしもあんなれば。ふかく此の火の事せいするもことわりぞのし。それゝさることまて。つねまの衣なんどや

きたぐらし。あるいたゝみゝ落して去らざるを。人ゝ見つけをしへられて。あわてふためき。ひろひすてたる。のたてらいたくすぐろゝおかし

朝またぎ霜よのなごり。いと寒むけくて。大のたかしらさしいづべくもあらぬゝ。さゝやのなるわらえべの。らうたげゝうちまぼみて。けぶりの調度もちいでつゝのきてらひ。きたなき物きよむとて。氷うちたゝき水そゝぎ。のた手ふき〳〵石ゝすりて。がて〳〵といひたる音さへ哀ゝきこゆ

おほのた。此調度のもてなしゝも。あるじの心のおしてからるゝなり。いつもちりぢみけがれて。火いれのてひきたなげゝ。きせるあがつきとぐこほりがちなるゝ。ゝくゝさへぞある。きらゝのゝみがきなして。きよげなるゝ。一きゝのむ心ちもよし。のゝりとて。あまり心をいれて。ちりもゐさせじともてあがめたるも。是のみゝや暮すらんと心つきなし。火のいくたびもきえたるいとむづのし。てひふきこぼしたるあさまし。さゝえもいてぞ」のくのみいみじくいひなすをいみきらゝむ人ゝ。それ去のあらじ。やうなき物なりと思ひすてなむもことわりのな。つく〳〵とたどりつゝ思へば。げゝてのなくあだなる物ゝこそとも思ひのへさる。もろこしゝても。とり〳〵ゝことわりてさだめらねたるとのや。いむことたぐしきほうしなんどの。ちのくさしよせだゝせぬもいとたふとし。のくまでゝ思ひとけどもなほおきがさき物ゝや。あしたゝおきたるゝも。まして物くひたるゝも。ぬるゝも。大らたてなるゝ折こそなけれ。のうつ斯ねゝけぢのくきたしき物ゝなゝのてあるゝ。さるをいみじき願たて。ものいみなんどして。七日もしゝ十日なんどたちゐたらんほどゝぞ。つねゝさしも思てぬ此君の。一日もなくてゝえあらぬことをむきるらんのし

尾花が本終

附録

奥の細道

○松尾芭蕉小傳

芭蕉本姓は松尾名は宗房なりしも通稱を金作また甚七郎といひ後忠左衛門と改めぬ風羅坊青羽扇釣月羊角等みなその別號なり今を距る事凡二百五十年正保元年伊賀國に生れたり父を儀左衛門と稱せり平宗清の後裔なり儀左衛門桃地氏を娶り四子を擧げぬ芭蕉はその季なり幼よりして穎悟甚學を好めり稍長じて大に老莊比學を修めかねて禪機に通じたり當時北村季吟といふものありき和歌に巧にまた俳諧に名ありしかど元祿年間幕府召して法印に任じぬこの人また古文に通ぜり源氏物語湖月抄枕草紙春曙抄八代集抄等の著書數多あり芭蕉かつて俳諧に意ありしかばすなはち季吟の門人となりて日夜怠らず大に其の秘訣を覺りたりといふ初藤堂和泉侯の老臣に仕へ頗殊勝の譽ありしが竊に僧西行の氣風を慕ひて夙に遁世の志を起しぬ常にいへらくわれこの世に生れたる上はせめて一功を樹てゝさて後に退かんと折しも藤堂侯幕府の命を受けて江戸小石川の水路を修めんとを芭蕉聞きて大に喜び自請ひて工事を監督し其の淡れるを見て直に病と稱して去りぬとぞ或いふ芭蕉はじめ和泉侯に仕へて寵を受くる事甚厚かりしに寛文六年圖らず其の喪に遇ひてよりやゝ世を厭ひ初め隱遁

の念頻に起りて屢任を辭したれども許されぞつひに宿直しける夜一書を遺して立ち去りぬとその時辭寂の僚友に遺てし〻句あり「雲となり輪となる雁の行方かな」これなりこの句もし信をべくむ後說或て正しからんたぞしそれとまれかくまれ其の世を遁れたる事實て固より疑ふべきにあらぞこれより暫く故里に歸り專俳諧に心を潛めしが延寶八年にいたりまた江戸に來りて庵を深川に構ひつひに薙髮して天々新桃青と號せり門人杉風といふもの芭蕉一株を贈りしを庭に植ゑ置きける年經て次第に繁殖し清楚頗愛すべくなりにしかむさてて其號ともせしなりといふ後ます〳〵人を集めて優々閑雅のうちに日を送りしが天和の初年深川に火災ありてこの庵また類焼にかゝりしかむ乃いで〻甲斐駿河の間に遊歷し大に友を求めて貞享元年また江戸に歸り同じ所に庵しけりかくて兩三年の間てなほ其のまゝにて打ち過ぎしが其の後秋を四方に曳きてじめ至る所に吟詠を遺さぞるなし元祿元年門人杜園を從へて吉野に遊び二年曾良を伴ひて奥州に下りぬ本篇てその日記なり翌年また粟津の草庵に趣きぬ後兩三年を經て元祿七年山城の嵯峨にいたり暫時去來が落柳舍といふに宿りしが同年の十月浪華を經て歸らんとせし時に客舍に病みて歿しぬこの時門人其角隨ひた

れぞこれを粟津の義仲寺に葬りぬ享年五十一歳なりき

芭蕉て俳諧の蘊奥を極めたるものといふべし其の吟詠をる處數萬てじめ談林の風を學びしが其の頓智洒落をのみ旨として滑稽に過ぐる所あれぞとてこれを廢しまた從來のものて只にその姿勢の艶麗をのみ事とし其の感想を問てざる傾あれぞとて新に一機軸をいだしたるなりといふ蓋芭蕉て大に杜甫蘇東坡等の風骨を索めこれを運用をるに當りて能く老莊及佛典の精粹を以てしかねて季吟より得たる與義と雅言とをもて成功せしものなるべし故に其の意の幽玄にしていひなしの巧妙なる常人といへども感をべきもの多しまして其の道の人をや誰かて敬慕せざらんされば其の名聲て大に天下に震ひ來りて門に入るもの其の數を知らぞつひに蕉門の十哲などいふものさへ現れいでしなり就中其角嵐雪去來許六等は其の最勝れたるものにして何れも能く師道を祖述し殆俳風を一變せりこれ其の中興の祖と稱せらるゝ所以なるべし芭蕉また繪を好み門人森川許六に學びたり其の得意なるは多く墨繪にして彩色したるもの尠く雅致頗愛すべしといふ其の文章てたぞ意のまゝを綴りなして毫も琢磨修飾せざるものゝ如しといへどもまた一種異樣の氣骨を備へて而も天眞爛熟の風あり

芭蕉の俳諧に於ける功績と既に前に述べたるが如し或は俳諧をもて放浪自恣の漫言に過ぎぬとなしこれを吟詠をるものもまたたゞ風雅優逸の徒にして毫も世事に通ぜざるものゝ如くいふものありといへども芭蕉は決してさる人物にあらぬ昔近江國に一商人あり芭蕉の指示によりて交易賣買の法を定め大に良結果を得たりしかど其の子孫いまなほこれを守りて更めぬつひに豪商と呼ばれ英國商人の風ありとさへ稱せらるゝまいたれりとぞこの一話極めて些事に似たりといへども以て芭蕉の萬に非凡なりしを知るに足らんか一能妙を得れば萬能また通ぬとは蓋しこれをいふなるべし

奥の細道

松尾芭蕉著

月日は百代の過客にして行きかふ年も又旅人なり舟の上に生涯をうかべ馬の口とらへて老をむかふる物は日の旅にして旅を栖とす古人も多く旅に死せるあり予もいつれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまぬ海濱にさすらへ去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひて暫く年も暮れ春立てる霞の空に白川の關こえんと思ひぞゝろ神の物につきて心をくるはせ道祖神のまねきにあひて取るもの手につかぬもの引の破をつゞり笠の緒付けかへて三里に灸すうるより松島の月まづ心にかゝりて住める方は人に譲り松風が別墅に移るに

草の戸も住替る代ぞひなの家

面は句を庵の柱に懸けおき彌生も末の七日明ぼのゝそら朧々として月は在明にて光をさまれる物からなほ不二の峯幽かにみえて上野谷中の花の梢又いつかはと心細し むつまじきかぎりは宵よりつどひて舟に乘りて送る千住と云ふ所にて舟をあがれば前途

三千里のおもひ胸にふさがりて。幻のちまたに離別の涙をそゝぐ

行春や鳥鳴魚目に涙

これを矢立の初として。行く道なほすゝまず。人々に途中に立ちならびて。後かげのみゆるまでにと見送るなるべし。ことし元禄二とせにや。奥羽長途の行脚只かりそめに思ひたちて。呉天に白髪の恨を重ぬといへども。耳にふれていまだめに見ぬさかひ。若し生きて歸らばと。定なき頼の末をかけ。其日漸草加と云ふ宿にたとり着きにけり。疲骨の肩にかゝれる物先くるしむ。只身すがらにと出で立ち侍るを。紙子一衣に夜の防ぎ。ゆかた。雨具。墨。筆のたぐひ。あるにさりがたき餞などしたるに。さすがに打ち捨てがたくて。路次の煩となれるこそありなけれ

室の八島に詣づ。同行曽良が曰。此神に木の花さくや姫の神と申して。富士一體なり。無戸室に入りて焼け給ふちかひの御中に。火々出見のみこと生れ給ひしより。室の八島と申す。又經を讀み習にし侍るもこの謂なり。將このしろといふ魚を禁ぜ。緣記の旨世に傳ふ事も侍りし

卅日。日光山の麓に泊る。あるじの云ひけるやう。我名を佛五左衛門と云ふ。萬正直を旨とする故に。人がらにも申し侍るまじ。一夜の草の枕も打ち解けて休み給へと云ふ。いかなる佛の濁世塵土に示現して。かゝる桑門の乞食順禮ごときの人をたすけ給ふにのと。あるじのなす事に心をとゞめてみるに。唯無智無分別にして。正直偏固の者なり。剛毅木訥の仁に近きたぐひ。氣稟の清質尤尊ぶべし。

卯月朔日。御山に詣拜す。往昔此御山を二荒山と書きしを。空海大師開基の時。日光と改め給ふ。千歳未来をさとり給ふにや。今此御光一天にかゞやきて。恩澤八荒にあふれ。四民安堵の栖穏なり。猶憚多くて。筆をさし置きぬ

あらたふと青葉若葉の日の光

黒髪山は霞かゝりて。雪いまだ白し

剃捨て黒髪山に衣更

曽良は河合氏にして。惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて。予が薪水の勞をたすく。このたび松しま。象潟の眺。共にせん事を悦び。且は羈旅の難をいたはらんと。旅立つ暁。髪を剃りて墨染にさまをかへ。惣五を改めて宗悟とす。仍りて墨髪山の句あり。衣更の二字力ありてきこゆ

廿餘丁山を登りて瀧あり。岩洞の頂より飛流して。百尺千岩の碧潭に落ちたり。岩窟に身をひそめ入れて。瀧の裏よりみれば。うらみの瀧と申し傳へ侍るなり

暫時に瀧に籠るや夏の初　曽良

那須の黒ばねと云ふ所に知人あれば。是より野越にかゝりて。直道をゆかんとす。遥に一村を見かけて行くに。雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて。明くれば又野中を行く。そこに野飼の馬あり。草刈をのこなげきよれば。野夫といへども。さすがに惰しらぬにいあらぎ。いかゞすべきや。されども此野に縱横にわかれて。うひ〳〵しき旅人の。道ふみたよらん。あやしう侍れば。此馬のとゞまる所にて。馬を返し給へとかし侍りぬ。ちひさき者ふたり馬の跡したひてそしる。獨に小姫にて名をかさねといふ。聞きなれぬ名のやさしかりければ

かさねとは八重撫子の名なるべし　曽良

やがて人里に至れば。あたひを鞍つゞに結ひ付けて。馬を返しぬ

黒羽の館代淨坊寺何がしの家に音信る。思ひかけぬあるじの悦び。日夜語りつゞけて。其弟桃翠など云ふが朝夕勤めとぶらひ。自の家にも伴ひて。親屬の方にもまねかれ。日をふるまゝに。ひと日郊外に逍遥して。犬追物の跡を一見し。那須の篠原をわけて。玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣うで。與市扇の的を射し時。別してわ我國氏神正八まんとちかひしも。此神社にて侍ると聞けば。感應殊にしきりに覺えらる。暮るれば桃翠宅に歸る

修驗光明寺と云ふ有り。そこにまねかれて。行者堂を拜す

夏山に足駄を拜む首途哉

當國雲岸寺のおくに。佛頂和尚山居跡あり

豎横の五尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨をかりせば

と松の炭して。岩に書き付け侍りといつぞや聞え給ふ。其跡みんと雲岸寺に杖を曳けば。人々すゝみて共にいざなひ。若き人おほく。道のほど打ちさわぎて。おがえを彼荒に至る。山に與あるけしきにて。谷道遥に松杉黒く苔したゝりて。卯月の天今猶寒し。十景盡くる所。橋をわたつて山門に入る

さてかの道に。いづくのほどにかと。後の山によぢのぼれば。石上の小菴岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關法雲法師の石寶をみるがごとし

木塚も庵にやぶらぬ夏木立

と。とりあへぬ一句を柱に殘し侍りし。是より殺生石に行く。館代より馬にて送らる。此口付のをのこ短冊得させよと乞ふ。やさしき事を望み侍るものかなと。

野を横に馬牽むけよほとゝぎす

殺生石は。温泉の出づる山陰にあり。石の毒氣はまだほろびず。蜂蝶のたぐひ。真砂の色の見えぬほどかさなり死す。又清水ながるゝの柳は芦野の里にありて。田の畔に殘る。此所の郡守戸部某の。此柳みせばやなど。折〳〵にの給ひ聞え給ふを。いづくのほどにかと思ひしを。今日此柳のかげにこそ。立ちより侍りつれ

田一枚植て立去る柳かな

こゝろもとなき日かゞ重なるまゝに。白川の關にかゝりて。旅心定りぬ。いかで都へと便求めしもことわりなり。中にも此關は三關の一にして。風騒の人心をとゞむ。秋風を耳に殘し。紅葉を俤にして。青葉の梢猶あはれなり。卯の花の白妙に茨の花の咲きそひて。雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裝を改めし事など。清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ

卯の花をかさしに關の晴着かな　曽良

とかくして越え行くまゝに。あぶくま川を渡る。左に會津根高く。右に岩城。相馬。三春の莊。常陸。下野の地をさかひて。山つらなるかげ沼と云ふ所を行くに。今日は空曇りて。物影うつらぬ。すか川の驛に等窮といふものを尋ねて。四五日とゞめらる。先白河の關いかにこえつるかと問ふ。長途のくるしみ身心つかれ。且は風景に魂うばゝれ。懷舊に腸を斷ちて。はる〳〵しう思ひめぐらさす

風流の初やおくの田植うた

無下にこえんもさすがにと語れば。脇第三とつゞけて。三卷となしぬ

此宿の傍に。大きなる栗の木陰をたのみて。世をいとふ僧あり。樠ひろふ太山もかくやと。問に覺えられて。ものに書き付け侍る。其詞

栗といふ文字は。西の木と有りて。西方淨土に便ありと。行基菩薩の一生。杖にも柱にも。此木を用ひ給ふとかや

世の人の見付ぬ花や軒の栗

等窮が宅をいでゝ。五里許檜皮の宿を離れて。あさか山あり。路より近し。此あたり沼多

し。かつみ刈る比もやゝ近うなれば。いづれの草を花かつみとは云ふぞと人々に尋ね侍れども。更に知る人なし。沼を尋ね人にとひ。かつみ〳〵と尋ねありきて。日は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて。黒塚の岩屋一見し。福島に宿る。あくれば忍のぶもぢ摺の石を尋ねて。忍ぶのさとに行く。遥に山陰の小里に。石なかば土に埋れてあり。里の童部の来りて教へける。昔は此山の上に侍りしを。往来の人の麥草をあらして。此石を試み侍るを。くみて此谷につき落せば。石の面。下ざまにふしたりと云ふ。さもあるべき事にや

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

月の輪のつたしを越えて。瀬の上と云ふ宿に出づ。佐藤庄司が舊跡は左の山際一里半許にあり。飯塚の里鯖野と聞きて。尋ね〳〵行くに。丸山と云ふに尋ねあたる。これ庄司が舊館なり。樒に大手の跡など人の教ふるにまかせて。泪を落し。またかたへの古寺に一家の石碑を殘す。中にも二人の嫁がしるし先哀なり。女なれどもかひ〳〵しき名の世に聞えつる物かなと。袂をぬらしぬ。墜涙の石碑も遠きにあらぜ。寺に入りて茶を乞へば。爰に義經の太刀。辨慶が笈をとゞめて。什物とす

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

五月朔日の事なり。其夜飯塚にとまる。温泉あれば。湯に入りて宿をかるに。土座に莚を敷きて。あやしき貧家なり。灯もなければ。ゐろりの火かげに寢所をまうけて臥す。夜に入りて雷鳴り雨しきりに降りて。臥せる上よりもり。蚤蚊にせゝられて眠らぜ。持病さへおこりて。消え入る計になん。短夜の空もやう〳〵明ぐれば又旅立ちぬ。猶夜の餘波こゝろ進まぜ。馬かりて桑折の驛に出づ。遥なる行く末をかゝえて。かゝる病覺束なしといへど。羇旅邊土の行脚。捨身無常の觀念。道路に死なん。是天の命なりと。氣力聊とり直し。路継横に踏みて。伊達の大木戸をまゐす。鐙摺。白石の城を過ぎ。笠島の郡に入れば。藤中將實方の塚は。いづくのほどならんと人にとへば。是より遥右に見ゆる山際の里を。みのに笠島と云ふ。道祖神の社。かた見の薄。今にありと教ふ。此比の五月雨に。道いとあしく。身つかれ侍れば。よそながら眺めやりて過ぐるに。箕輪。笠島も五月雨の折にふれたりと

笠島はいづこを月のぬかり道

岩沼に宿る

武隈の松にこそめさむる心地はすれ。根は土際より二木にわかれて。昔の姿うしなはぜとしらる。先能因法師思ひ出でゝ。往昔むつの守にて下りし人。此木を伐りて。名取川の橋

杭にせられたる事などあればにや。松に此たび跡もなしとに詠みたり。代々或に伐りあ
るひに植繼などあたりと聞くに。今將千歳のかたちとゝのほりて。めでたき松のけしき
になん侍る

武隈の松みせ申せ遲櫻と擧白と云ものゝ餞別したりければ

櫻より松に山木を三月越し

名取川を渡りて仙臺に入る。あやめふく日なり。旅宿をもとめて。四五日逗留す。爰に畫
工加右衛門と云ふものあり。聊心ある者と聞えて知る人になる。この者年比さだかなら
ぬ名どころを考へ置き侍ればとて。一日案内す。宮城野の萩茂りあひて。秋の氣色思ひや
らる。玉田よこ野つゝじが岡に。あふひ咲くころなり。日影もゝらぬ松の林に入りて。爰を
木の下と云ふとぞ。昔もかく露ふかければこそみさぶらひみかさとによみたれ。藥師堂
天神の御社など拜みて。其日にくれぬ。猶松島鹽がまの所々畫にかきて送る。且紺の濃淡
つけたる草鞋など餞す。されば こそ風流のしれもの爰に至りて。其實を顯すなれ

あやめ草足に結ん草鞋の緒

かの畫圖にまかせてたどり行けば。おくの細道の山際に。十符の菅あり。今も年々十符
の菅菰を調へて。國守に献ぜと云へり

壺碑　　市川村多賀城にあり

つぼの石ぶみに。高さ六尺餘。横三尺計歟。苔を穿ちて文字幽なり。四維國界之數里をしる
す。此城神亀元年。按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所里也。天平寶字六年。參議東海東山
節度使同將軍惠美朝臣獨修造而十二月朔日とあり。聖武皇帝の御時に當れり。むかしよ
りよみ置かるゝ歌枕。おほく語り傳ふといへども。山崩れ川落ちて。道あらたまり。石に埋
れて土にかくれ。木に老いて若木にかはれば。時移り代變じて。其跡たしかならぬ事の
みを。爰に至りて疑なき千歳の記念。今眼前に古人の心を開す。行脚の一德。存命の悦び。
覊旅の勞をわすれて涙も落つるばかりなり

それより野田の玉川。沖の石を尋ぬ。末の松山に寺を造りて。末松山といふ。松のあひ〳〵
皆墓はらにて。こねをかねし。枝をつらぬる契の末も。終にかくのごとしと悲しさも増り
て。鹽がまの浦に入相のかねを聞く。五月雨の空聊これて。夕月夜幽に籬が嶋もほど近し。
蜑の小舟こぎつれて。看わかつ聲々に。つなでかなしもとよみけん心もしられて。いとど
哀なり。其夜。目盲法師の琵琶をならして。奥淨瑠璃と云ふものをかたる。平家にもあち

ぞ。舞ふもあらぞ。ひなびたる調子うち上げて。枕ちかうかしましけれど。さすがに遺土の遺風忘れざるものから。殊勝に覺えらる。早朝鹽がまの明神に詣づ。國守再興せられて。宮柱ふとしく。彩椽きらびやかに。石の階九仞に重り。朝日あけの玉がきをかがやかす。かゝる道の果。塵土の境。扨神靈あらたにましますこそ。吾國の風俗なれと。いとたふとし。神前に古き寶燈あり。かねの戸びらの面に。文治三年和泉三郎寄進とあり。五百年來の佛。今目の前にうかびてそゞろに珍らし。渠は勇義忠孝の士なり。佳命今に至りて。したはぞといふ事なし。誠に人能く道を勤め義を守るべし。名もまた是にしたがふといへり。日既に午にちかし。船をかりて松島にゝたる。其間二里餘。雄島の磯につく

抑ことふりにたれど。松島は扶桑第一の好風にして。凡洞庭西湖を恥かしむ。東南より海を入れて。江の中三里。浙江の潮をたゝふ。島々のかぞを盡くして歌つものは天を指しふすものは波に匍匐し。あるは二重に畳みて。左にゝかれ右につらなる。負ふあり。抱けるあり。兒孫愛をがごとし。松の緑こまやかに。枝葉汐風に吹きたはめて。屈曲おのづからためたるがごとし。其氣色宵然として。美人の顔を粧ふ。ちとや振神のむかし。大山ぞみのなせる功ざまや。造化の天工。いづれの人か筆をふるひ。詞を盡さん

雄島が磯は地つゞきて。海に出てたる島なり。雲居禪師の別室の跡。座禪石などあり。將。松の木陰に世をいとふ人も。稀〳〵見え侍りて。落穗松笠など打ちけぶりたる草の菴。閑に住みなし。いかなる人といしられぞながら。先なつかしく立ちよるほどに。月海にうつりて。晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求むれば。窓をひらき。二階を作りて。風雲の中に旅寐するこそ。あやしきまで妙なる心地はせらるれ

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曽良

予は。口をとぢて眠むらんとしていねられぞ。舊庵をわかるゝ時。素堂松島の詩あり。原安適松がうらぶまの和歌を贈らる。袋を解きてこよひの友とす。且杉風濁子が發句あり

十一日瑞岩寺に詣づ。當寺三十二世の昔。真壁の平四郎出家して。入唐歸朝の後開山す。其後に雲居禪師の德化に依りて。七堂甍改りて。金壁莊嚴光を耀かし。佛土成就の大伽藍となれりける。彼見佛聖の寺はいつくにとしたとる。十二日平和泉と心ざし。あねとの松。緒だえの橋など聞き傳へて。人跡稀に。雉兎蒭蕘の往きかふ道。そこともわかぞ。終に路ふみたがへて。石の巻といふ湊に出づ。こがね花咲くとよみて奉りたる金花山。海上に見わたし。數百の廻船入江につどひ。人家地をあらそひて。竈の煙立ちつゞけたり。思ひか

けむかゝる所にも来れる哉と。宿からんとせれど。更に宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜をあかして。明くれば又しらぬ道まよひ行く。神のゐたり。尾ぶちの牧。まの〻壺とらなど。よそめにみて遥なる坪を行く。心細き長沼にそうて戸伊摩と云ふ所に一宿して。平泉に到る。其間廿餘里ほどゝおぼゆ

三代の榮耀。一睡の中にして。大門の跡は。一里こなたにあり。秀衡が跡は。田野になりて金鶏山のみ形を殘す。先高館にのぼれば。北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて。高館の下にて。大河に落ち入る。康衡等が舊跡は。衣が關を隔てゝ。南部口をさし堅め。夷をふせぐとみえたり。偖も義臣すくつて。此城にこもり。功名一時の叢となる。國破れて山河あり。城春にして草青みたりと。笠打ち敷きて。時のうつるまで涙を落し侍りぬ

夏草や兵どもが夢のあと　　曾良

卯の花に慮房みゆる白毛かな

無ねて耳驚ろかしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し。光堂は三代の棺を納め。三尊の佛を安置す。七寶散りうせて。珠の扉風にやぶれ。金の柱霜雪に朽ちて。既に頽廢空虛の叢と成るべきを。四面新に圍みて甍を覆ひて風雨を凌ぎ。暫時千歳の記念とはなれり

五月雨の降のこしてや光堂

南部道遥にみやりて。岩手の里に泊る。小黒崎。みつの小島を過ぎて。なるこの湯より尿前の關にかゝりて。出羽の國に越えんとせ。此路旅人稀なる所なれば。關守にあやしめられて。漸として關をこす。大山をのぼりて日既に暮れければ。封人の家を見かけて。舍を求む。三日風雨あれて。よしなき山中に逗留せ

蚤虱馬の尿する枕もと

あるじの云ふ。是より出羽の國に大山を隔てゝ。道さだかならざれば。道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申せ。さらばといひて。人を頼み侍れば。究竟の若者反脇指をよこたへ。樫の杖を携へて。我々が先に立ちて行く。けふこそ必あやふきめにもあふべき日なれど。辛き思ひをなして。後について行く。あるじの云ふにたがはせ。高山森々として。一鳥聲きかず。木の下闇み茂りあひて。よる行くがごとし。雲端につちふる心地して。篠の中踏み分け〳〵。水をわたり岩に蹶て。肌につめたき汗を流して。最上の莊に出づ。かの案内せしをのこの云ふやう。此みち必不用の事あり。慎なうおくりまゐらせて。仕合したりと

よろこびてゐかれぬ。跡にきゝてだに胸とゞろくのみなり

尾花澤にて清風と云ふ者を尋ぬ。られい富めるものなれども。志いやしからぬ。都にも折々かよひて。さすがに旅の情をも知りたれば。日比とゞめて。長途のいたてりさまゝにもてなし侍る

涼しさを我宿にしてねまるなり

這出よかひやか下のひきの聲

まゆてきを俤にして紅粉の花

蟲飼する人い古代のすがた哉　曾良

山形領に立石寺と云ふ山寺あり。慈覺大師の開基にて。殊に清閑の地なり。一見すべきよし。人々のをゝむるに依りて。尾花澤よりとつて返し。其間七里ばかりなり。日いまだ暮れぬ。杜下の坊に宿かり置きて。山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし。松柏年舊り。土石老いて。苔滑に。岩上の院々扉を閉ぢて。物の音きこえぬ。岸をめぐり。岩を這ひて佛閣を拜し。佳景寂寞として。心すみ行くのみおぼゆ

閑さや岩にしみ入蟬の聲

最上川のらんと大石田といふ所に日和を待つ。爰に古き俳諧の種こぼれて。忘れぬ花のむかしをしたひ。芦角一聲の心をやとらげ。此道にさぐり足して新古ふた道にふみまがふといへども。みちしるべする人しなければと。わりなき一卷殘しぬ。このたびの風流爰に至れり

最上川いみちのくより出でゝ。山形を水上とす。こてんこやふさなど云ふおそろしき難所あり。板敷山の北を流れて。果い酒田の海に入り。左右山覆ひ。茂みの中に舟を下す。是に稻つみたるをやいな舟といふならし。白糸の瀧い。青葉の隙々に落ちて。仙人堂岸に臨みて立つ。水みなぎりて舟あやうし

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日羽黑山に登る。圖司左吉と云ふ者を尋ねて。別當代會覺阿闍闍に謁を。南谷の別院に舍して。懇ろの情こまやかにあるじせらる

四日本坊において俳諧興行

有難や雪をかをらせる南谷

五日權現に詣づ。當山開闢能除大師い。いづれの代の人といふ事をしらず。延喜式に羽州

里山の神社とあり。書寫黒の字を里山となせるゝや。羽州黒山を中略して。羽黒山といふゝや。出羽といへるも鳥の毛羽を。此國の貢ゝ獻ると風土記ゝ侍るとやらん。月山湯殿を合せて三山とす。當寺武江東厳ゝ屬して。天台止觀の月明らかゝ。圓頓融通の法の灯かゝげそひて。僧坊棟をならべ。修驗行法を勵し。靈山靈地の驗効。人貴び且恐る。繁榮長ゝしてめでたき御山と謂ひつべし

八日。月山ゝのぼる。木綿しめ身ゝ引きかけ。寶冠ゝ頭を包み。強力と云ふものゝ道びかれて。雲霧山氣の中ゝ。氷雪を踏みてのぼる事八里。更ゝ日月行道の雲關ゝ入るかとあやしまれ。息絶え身こゞえて。頂上ゝ臻れば。日沒して月顯る。笹を鋪き。篠を枕として。臥して明くるを待ち。日出でゝ雲消ゆれば湯殿ゝ下る

谷の傍ゝ鍛冶小屋と云ふあり。此國の鍛冶靈水を撰びて。爰ゝ潔齋して劍を打ち終り月山と銘を切りて。世ゝ賞せらる。彼龍泉ゝ劒を淬とかや。干將莫邪のむかしをあたふ。道ゝ堪能の執あさからぬ事しられたり。岩ゝ腰かけてあばしやすらふなど。三尺むかりなる櫻のつぼみ半ゝ開きたるあり。ふり積む雪の下ゝ埋れて。春を忘れぬ遲ざくらの花の心ありなし。炎天の梅花爰ゝかをるが如し。行尊僧正の歌の哀も。爰ゝ思ひ出でゝ。猶まさりて覺ゆ。總て此山中の微細。行者の法式として他言する事を禁ず。仍りて筆をとゞめて記さず。坊ゝ歸れば。阿闍闍の需ゝ依りて。三山順禮の句々短冊ゝ書く

涼しさやほの三日月の羽黒山
雲の峯幾つ崩て月の山
語られぬ湯殿ゝぬらす袂かな
湯殿山錢ふむ道の泪かな　曽良

羽黒を立ちて。鶴が岡の城下長山氏重行といふものゝふの家ゝむかへられて。俳諧一巻あり。左吉も共ゝ送りぬ。川舟ゝ乘りて酒田の湊ゝ下る。淵庵不玉といふ醫師の許を宿とす

有明や山や吹浦かけて夕をゝみ
暑き日を海ゝいれたり最上川

江山水陸の風光。數を盡くして。今象潟ゝ方寸を責め。酒田の湊より東北の方。山を越え磯を傳へ。いさごをふみて其際十里。日影やゝかたぶく比。汐風真砂を吹き上げ。雨朦朧として。鳥海の山かくる。闇中ゝ莫作して。雨も又奇なりとせば。雨後の晴色又頼母敷と蜑の苫

屋に膝をいれて。雨の晴を待つ。其朝天能く霽れて。朝日花やかにさし出づる程に。象潟に舟をうかぶ。先能因島に舟をよせて。三年幽居の跡をとぶらひ。むかふの岸に舟をあがれむ。花の上こぐとよまれし櫻の老木。西行法師の紀念をのこす。江上に御陵あり。神功后宮の御墓といふ。寺を干滿珠寺といふ。此處に行幸ありし事。いまだ聞かず。いかなる事にか。此寺の方丈に座して。簾を捲けむ。風景一眼の中に盡くして。南に鳥海天をさゝへ。其陰うつりて江にあり。西にむや〳〵の關路をかぎり。東に堤を築きて。秋田にかよふ道。遥に海北に構へて浪打ち入るゝ所を汐越と云ふ。江の縱橫一里ばかり。俤松島にかよひて。又異なり。松島は笑ふが如く。象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはへて。地勢魂をなやますに似たり

象潟や雨に西施がねぶの花　芭蕉

汐越や鶴はぎぬれて海涼し　曾良

祭禮

象潟や料理何くふ神祭　曾良

蜑の家や戸板を敷て夕涼　みの、國の商人　低耳

岩上に睢鳩の巢をみる

浮こゑぬ契ありてやみさこの巢　曾良

酒田の餘波日を重ねて。北陸道の雲に望み。遥々のおもひ胸をいたましめて。加賀の府まで百卅里と聞く。鼠の關をこゆれむ。越後の地に歩行を改めて。越中の國一ふりの關に到る。此間九日。暑濕の勞に神をなやまし。病おこりて事をしるさず

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天河

今日は。親しらず。子しらず。犬もどり。駒返しなどいふ。北國一の難所を越えて。つかれ侍れむ。枕引きよせて寐たるに。一間隔てゝ西の方に若き女の聲。二人計ときこゆ。年老いたるをのこの聲も交りて。物語をするをきけば。越後の國新潟といふ所の遊女なりし。伊勢參宮をするとて。此關までをのこの送りてあるいと古郷にかへる。文したゝめて。てかなき言傳などしやるなり。白浪のよるべきけに身をてふらかし。あさのこの世をあさましう下りて定めなき契。日々の業因いかにつきなしと物いふをきく〳〵寐入りて。あした旅立つに。我々にむかひて。行くへしらぬ旅路のうさ。あまり覺束なう悲しく侍れむ。見えかくれに

も御跡をしたひ侍らん。衣の上の御情に。大慈のめぐみをたれて。結縁せさせ給へと涙を落を。不便のことにいい侍れども。我々い所々にてとゞまる方おほし。只人の行くにまゝせて行くべし。神明の加護かならゞ慈なかるべしといひ捨てゝ出づ。あはれしばらくやまざりけらし

一家に遊女もねたり萩と月

曽良にかたれば書さとゞめ侍る。くろへ四十八が瀬とかや。數しらぬ川をわたりて。那古といふ浦に出づ。擔籠の藤浪い春ならゞとも。初秋の哀れとふべきものをと。人に尋ぬれば。是より五里いそ傳ひして。むかふの山陰にいり。蜑の苫ぶきかをかなれば。蘆の一夜の宿かをものあるまじといひおとされて。かゞの國に入る

ほせの香や分入右い有磯海

卯の花山。くりからが谷をこえて。金澤い七月中の五日なり。爰に大坂よりかよふ商人。何處といふ者あり。それが旅宿をともにを。一笑と云ふものい。此道にをける名のほの〳〵聞えて。世に知る人も侍りしに。去年の冬。早世したりとて。其兄追善を催をし

塚も動け我泣聲い秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し年毎にむけや瓜茄子

途中險

あか〳〵と日い難面もあきの風

小松といふ所にて

しをらしき名や小松吹萩すゝき

此所太田の神社に詣づ。實盛が甲錦の切あり。往昔源氏に屬せし時。義朝公より給いらせ給ふとかや。げにも平士のものにあらゞ。目庇より吹き通しまで。菊から草のほりもの金をちりばめ。龍頭に鍬形に打ちたり。實盛討死の後。木曽義仲願狀にそへて。此社にうめられ侍るよし。樋口の次郎が使せし事共。まのあたり緣紀にみえたり

むさんやな甲の下のきりぎす

山中の温泉に行くほど。白根が嶽跡にみなしてあゆむ。左の山際に觀音堂あり。花山の法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後。大慈大悲の像を安置し給ひて。那谷と名付け給ふとや。那智谷組の二字をわかち侍りしとぞ。奇石さま〳〵に古松植ゑならべて。萱ぶきの

小堂。岩の上に造りかけて。殊勝の土地なり

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す。其功有明に次ぐと云ふ

山中や菊はたをらぬ湯の匂

あるじとする物は。久米之助とていまだ小童なり。かれが父俳諧を好み。洛の貞室若輩のむかし愛に来りし比。風雅に辱しめられて。洛に歸りて。貞徳の門人となりて世にしらる。功名の後。此一村判詞の料を請ぜといふ。今更むかし語とはなりぬ

曽良は腹を病みて。伊勢の國長島といふ所にゆかりあれば。先立ちて行くに

行々てたふれ伏とも萩の原　曽良

と書き置きたり。行くものゝ悲しみ。殘るものゝうらみ。隻鳧の雲にまよふが如し。予も又

今日よりや書付消さん笠の露

大聖寺の城外全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地なり。曽良も前の夜。此寺に泊りて

終宵秋風聞やうらの山

と殘す。一夜の隔。千里に同じ。吾も秋風を聞きて衆寮に臥せど。明ぼのゝ空近し。讀經の聲すむまゝに。鐘板鳴りて食堂に入る。けふは越前の國へと。心早卒にして堂下に下るを。若き僧ども紙硯をかゝえ。階のもとまで追ひ来る。折節庭中の柳散れど

庭掃て出るや寺に散る柳

とりあへぬさまして。草鞋ながら書き捨てつ。越前の境吉崎の入江を舟に棹して。汐越の松を尋ぬ

終宵嵐に波をたゝせて

月をたれたる汐越の松　西行

此一首にて數景盡きたり。もし一辯を加ふるものは。無用の衫を立つるがごとし

北岡天龍寺の長老。古き因あれど尋ぬ。又金澤の北持といふもの。かりそめに見送りて。此處までしたひ来る。所々の風景。過ぐさを思ひつゞけて。折節あてれなる作意など聞ゆ。今既に別に望みて

物書て扇引さく餞波哉

五十丁山に入りて永平寺を禮す。道元禪師の御寺なり。邦機千里を避けて。かゝる山陰に

跡をのこし給ふも。貴さゆゑありとかや

福井に三里計なれど。夕飯したゝめて出づるに。たそがれの路たど〳〵し。爰に等哉と云ふ古き隱士あり。いづれの年にか江戸に来りて。予を尋ねし。遥十とせ餘りなり。いかに老いさらばひてあるにこの。將死にけるにこのと人に尋ね侍れど。いまだ存命してそこ〳〵と教ふ。市中ひそかに引き入りて。あやしの小家に。夕顔へちまのはひかゝりて。雞頭そゝ木々に戸ぼそをかくも。さてゝ此うちにこそと門を扣けば。侘しげなる女の出でゝ。いづくよりわたり給ふ。道心の御坊にや。あるじゝ此あたり何がしといふものゝ方に行きぬ。もし用あらば尋ね給へといふ。かれが妻なるべしとしらる。むかし物がたりにこそかゝる風情に侍れと。やがて尋ねわびて。その家に二夜とまりて。名月につるがのみなとにたび立つ。等哉も共に送らんと。裾をかしうからげて。路の枝折とうかれ立つ。嶄白根が嶽かくれて。比那が島あらはる。あさむつの橋を渡りて。玉江の蘆に夜に出でにけり。鶯の關を過ぎて。湯尾峠を越ゆれば。燧が城かくる。やまに初雁を聞きて。十四日の夕ぐれ。つるがの津に宿をもとむ。その夜月殊に晴れたり。あすの夜もかくあるべきにやといへば。越路の習ひ。なほ明夜の陰晴しがたしと。あるじに酒すゝめられて。氣比の明神に夜參

も。仲哀天皇の御廟なり。社頭神さびて。松の木の間に月のもり入りたる。おまへの白妙霜を敷けるがごとし。往昔。遊行二世の上人。大願發起の事ありて。みづから草を刈り土石を荷ひ。泥濘をかはかせて參詣往来の煩なし。古例今にたえず。神前に真砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申し侍ると。亭主のかたりける

月清し遊行のもてる砂の上

十五日亭主の詞にたがはず雨降る

名月や北國日和定なき

十六日空霽れたれどまをほの小貝ひろはんと。種の濱に舟を走らす。海上七里あり。天屋何某といふもの破籠小竹筒などこまやかにしたゝめさせ。僕あまた舟にとりのせて。追風時のまに吹き着けぬ。濱にそづかなる海士の小家にて。侘しき法華寺あり。爰に茶を飲み。酒をあたゝめて。夕ぐれのほどいとさ感に堪へたり

寂しさや須磨にうちたる濱の秋

浪の間や小貝にまじる萩のこ　云

其日のあらまし。等哉に筆をとらせて寺に殘す。露道も此みなとまで出でむかひて。みの

ゝ國へと伴ふ。駒ゝたをけられて大垣の莊ゝ入れむ。曽良も伊勢より来り合ひ。越人も馬をとばせて。如行が家ゝ入り集まる。前川子荊口父子。其外志たしき人々。日夜とぶらひて。蘇生の者ゝあふがごとく。且悦び且いたゐる。旅の物うさもいまだやまざるゝ。長月六日ゝなれむ。伊勢の遷宮をがまんと。また舟ゝのりて

蛤のふたみゝわかれ行秋ゝ

奥の細道 終

明治廿四年二月廿八日印刷
同　年三月三日出版

版權所有

校訂編輯者　無（佐藤改）　今泉定介　東京小石川區西江戸川町一番地
同　畠山健　同　牛込區築土八幡町二十三番地
發行印刷者　無　吉川半七　同　京橋區南傳馬町一丁目十二番地
關西大賣捌所　松村九兵衛　大阪南區心齋橋南一丁目
發賣人　林平治郎　東京日本橋區箔屋町八番地
印刷所　必昇社　東京々橋區鎗屋町九番地

工A73

各府縣發賣所

東京日本橋通三丁目　北善書店
同京橋區尾張町　東海堂
同三十間堀　良明堂
同神田表神保町　中西屋邦太
大阪備後町　梅原龜七
同北久太郎町　柳原喜兵衛
同久寶寺町　三木佐助
同心齋橋南　嵩山
京都新町通　便利堂
同河原町二條下　大黑屋書舗
熊本新二丁目　長崎次郎
神戸相生橋東　熊谷久榮堂
佐賀白山町　河内壯助
飛驒高山　朴屋重兵衛
岐阜米屋町　三浦源助
愛知名古屋本町　川瀨代助
靜岡新通一丁目　勝見儀助
同掛川　三原屋甚藏
石川金澤　近田太平
新潟新潟市　林富吉
同水原　西村六平
同長岡　目黑十郎
同同　上田屋治八
同加茂　丸山音

新潟三條　樋口小左衛門
長野善光寺前　西澤喜太郎堂
同松本　水琴小佐傳次
同小諸　山梨甲府八日町　五明堂
群馬前橋本町　煥乎堂
宮城仙臺國分町　金港堂
同同　高藤書店
同同大町　正々堂
岩手盛岡中橋通　便益堂
山形八日町　五十嵐太右衛門
秋田大町　本間金之助
北海道函館　魁文社
同札幌　石塚猪男藏
福島福島町　萱間左右太堂
栃木宇都宮町　正々堂
茨城水戸上市泉町　川又銀藏
同土浦町　間原平右衛門
同石岡町　高野清助
同古河町　高木文正堂
千葉佐原　朝野利兵衛
同東金　多田屋本店
同千葉　多田屋支店
同佐倉　村山書房

914.5
H997
1